

Q 「音訓同時指導」は、いつからしたらよいでしょうか。

A 「1セット5過程」方式では、「第1過程（音）読みかた」で、
「子どもが理解できる範囲で、漢字語*・訓読みの語を板書する」

（「1セット5過程方式」による新出A漢字のとりたて指導略説，PDF：219KB）

としています。

その漢字の音と訓とを同時に指導することが効果的だからです。

*「漢字語」とは、通常、漢字で表記するコトバで、いわゆる「熟語」をさします。

（1）「音訓同時指導」の原則

- ① 1年生からはじめ、各学年でおこないます。
- ② こどもたちが理解できる語の範囲にしぼります。

（2）「音訓同時指導」の意義

- ① 漢字・漢字語の意味の理解が深まります。
 (例)「遠足」は、「遠くまで足で歩く」という意味なんだ！！
- ② 一字の漢字から語彙を拡充できる。
 (例)「目」の場合、「ものを見る目」だけでなく、つぎのようなコトバを獲得する可能性があります。
 「目つき、目がしら、目先、役目、目印、一時間目、一丁目」
 「注目、目前、目げき、目的、目ひょう、科目、種目、曲目、目次」
- ③ 不自然な読みかえ漢字指導を避けられます。
 (例)教科書M社「犬」の場合
 「いぬ」（1年下「ぼくの犬」）－「ケン」（5年「愛犬」）
 →「名犬」「ばん犬」「野犬」などは5年まで読めないか。

（3）低学年の子に音と訓とを区別できるか

たとえば、「先」の字のとき、「セン」が音読みで、「さき」が訓読みであると教えても理解できないでしょう。

小学校1，2年の段階では、「別の読みかた，使いかた」と言うのがよいでしょう。

「先 セン」の意味がわかれば、「さき」という意味でつかう「先 セン」に関連する漢字語をいくつか考えられることが期待できます。

「先パイ，先トウ，先月，先シュウ，先ゾ，ユウ先セキ，先コウをとる」などを発言する可能性があります。

(4) すべての音訓を1年生から指導するのか

- ① その学年の子の大部分に理解できるコトバの範囲内とします。
児童・生徒の実態に応じて指導するのがよいでしょう。
(例) 1年「名，目」を学習したからといって「名目」は無理。
2年「原，理」を学習したからといって「原理」は無理。

- ② 小学生の場合，小学校で学ばない読みかたは，対象としません。
(例)「夕」の場合，漢字辞典には「一朝一夕」の「セキ」という音ものっています，中学校で学ぶ音であり，指導の対象にしません。
[参考]「[音訓の小・中・高等学校段階別割り振り表](#)」(PDF:970KB, 2017年3月, 文部科学省)

- ③ 音のみ，訓のみの漢字は，「音訓同時指導」の対象外です。
(例)「校」は，訓がありません。常用漢字表にもない「校倉造り」の「あぜ」や「くらべる」「かんがえる」などの訓が漢字辞典にあっても，指導の対象にしません。